九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

田村俊子における女性主人公の価値観の転換 : 個人的なものから社会的なものへ

蘭, 蘭
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/24641

出版情報：Comparatio. 15, pp.81-88, 2011-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

田村俊子における女性主人公の価値観の転換

——個人的なものから社会的なものへ——

蘭　蘭

はじめに

田村俊子の描く女性像は多岐にわたっているが、まず若い女性像について、その変化の有様を作品群を通して見ていくならば、父母の「慈愛」が欠乏したために他人の愛撫を求めすぎて早くからセクシュアリティを意識するようになった「匂ひ」の「私」から、中産階級の家庭に生まれ、初潮を迎えて思春期のデリケートな心身の状態に置かれ、純粋な友情と愛情を求めることを阻む封建的な社会に夢の世界で反抗している「離魂」のお久、更に、レイプされ、家族を毒する封建的婦徳や家父長制の思想に少女なりの楽しみを喪失させられ、幻覚の中で封建的風潮に対抗しようとしている「枸杞の実の誘惑」の智佐子、自分の求めている生き方で自活の道を歩み、親孝行するために自ら志を絶ち、知恵と伝統的な婦女の美徳を兼ね備えている「あきらめ」の女子大生・富枝にまで変化・成長しているといえよう。夢の中での反抗から現実での自己選択に至り、無知の状態から、封建的風潮に対抗する意識に目覚め、自分の意志で物事を決めるに至るまで、俊子の小説中の若い女性像は耽美的なイメージから次第に前衛的な思想と知恵を兼備する姿に変化している（注一）。

また、結婚前後の時期にある女性像は、大学を卒業してすぐに結婚し、才媛と評判されても豊かな才能を生かすこともなく、自己を独立させずに「良妻賢母」の運命に服従し、家庭の人となっている「静岡の友」の「友」、初志を貫き独身を通して、女性によって作られている雑誌の編集者として自立している「K」、家庭と仕事を両立させ、時代の先端をゆくと自認する「私」の三人の女性から、旧式の結婚制度の下で夫に抑圧され、夫への反抗意識が朦朧とした段階にある家庭主婦幸子（「幸子の夫」）、子を待望する夫に対して反攻心を抱く秋江（「子育地蔵」）、夫に夫婦関係を破壊するような言葉を投げつける形で夫への反感を表す鴇子（「魔」）、更に、夫と激しく争い、家出するまでに至るせい子（「誓言」）に至るまで、さまざまな状況に置かれた女性として描かれている。こうした女性たちは、やがて、意識が目覚めるにつれ、正々堂々と立ち上がって夫と戦い、女性として、また妻としての権利を勝ち取るまでに変化・成長している。こうした「新しい女」の中には、女性の社会的な存在が認知されていない時代に、夫に暴力を加えられても、文学創造の職業に対する情熱を依然として燃やしているみのる（「木乃伊の口紅」）や、かつて自立した職業女性であったが結婚後、芸術活動に邁進する過程で遭遇した家事や育児などの問題に対して懸命に戦っている優子（「彼女の生活」）など、精いっぱい家庭や仕事を両立させている女性も登場する。そして、「強くなった女」はやがて、本当に生きたい生き方で生きていく

ために、あるいは新たな生活や芸術を獲得するために、結婚生活の束縛から離脱するしかない、つまり、離婚することを選択するしかないと考えている龍子（「炮烙の刑」）や道子（「破壊する前」）のような女性へと進化するのである。俊子の描く「新しい女」はこのようにさまざまヴァリエーションをもって苦闘し揺曳しているのである（注二）。

このような女性人物たちの変化は、ある意味で、俊子の閲歴の変化と対応しているといえるかも知れない。

そのような俊子が十八年間の外国生活で、移民地の労働婦人の貧困の生活を目の当りに見て、帰国後、ロシア革命におけるプロレタリアの勝利は、「私の思想上に新しい灯をとも」したと語り、「この思想が自分の血と肉となるまでにはたいへんな時間がかかった」（注三）と語っている。俊子の描く女性像はこの時期から変化の度合いを強めている。

本稿では、そうした時期にある女性の描かれ方について考察し、その女性像の変化を分析しながら、説明したい。

一、社会主義の思想を信奉する日系二世の娘――「小さき歩み」三部作

大正七年、文学創造の行き詰まる状態に陥った俊子は、田村松魚との結婚生活の終わりを宣告した象徴的な小説「破壊する前」を発表した後、恋人のジャーナリスト・鈴木悦の跡を追ってカナダのバンクーバーへ旅立った（注四）。十八年間ほどカナダの日本人移民社会で生活し、人間としての権利を獲得するために闘ってきた移民労働者の同志と自認している俊子は、もはや「官能の享楽や頽廃」、「男女の葛藤、相克」などをテーマにした小説を書くことから、社会性、思想性を持つ作品を創作することへ転換していた。北米から帰国した俊子の文学創造上の価値観は、移民地を題材にする小説「小さき歩み」三部作の中で体現されている。

小説「小さき歩み」（「改造」一九三六年十月）、「薄光の影に寄る――小さき歩み（続）――」（「改造」一九三六年十二月）、「愛は導く――小さき歩み（完）――」（「改造」一九三七年三月）の三部作は、若い日系二世の娘の眼差しを通して、人種差別、性差別、宗教問題など、移民者社会の内部の問題を描いたものである（注五）。北米を舞台とする俊子の小説（注六）は作品集未収録でもあるので、ストーリーをやや詳述しながら論じていきたい。

まず「小さき歩み」は、女主人公ジュンが三人の友達と肩を並べながら校舎を出る場面から始まる。夏休みの間に、伯母の住むカリフォルニアに遊びに行くドロシイと、母親とヨーロッパへの旅行に行くルシイと、山にキャンプに行くリリイの三人はジュンの学校の「白い人種」の友達である。それと対照的に、「白い人種」でないジュンは、夏休みに田舎の父母の所に苺摘みを手伝いに行く。富裕な階級の友達や「白い人種」の友達と、なかなか交わることが出来ないとジュンは最近意識して始めたのである。

階級、人種が異なるために学生同士の生活は様式が異なり、「市の中心から東に当る下町の、日本人の多く住む区内は、日光を吸ふことのできない生活者の巣喰ふ一角のやうに、その付近は荒れ

て、空缶や紙の箱を棄て放しにした雑草の延びた空地があつたり、硝子窓の破れた暗い建物が倒れ残つてゐたり、舗道はいつも口から吐き出したチューインガムやバナナの皮でよごれてゐる」というような環境衛生の劣悪な場所に住んでいるジュンは、最近自分が「白い人種」でないという寂しさをはっきり感じていたのである。

人種差別によって「ソシアル・ライフ」や居住環境が制約されるだけでなく、人間としての基本的な権利も認められていない。二年前、ジュンの兄ジョージが公設プールへ泳ぎに行った時、東洋人は入場させない規定だと言って拒絶された。人間並みに待遇されないジョージは、「白い人種」の娘を恋する資格もないと思って学校を止めたのである。「自分たちは人種の異なった卑しい移民だから侮蔑されるのだ。移民の子だから」と考えるジョージは、二世が白人社会で受ける人種差別と侮蔑は、親たち一世が蒔いた種によると思い、「日本人を絶対に見ないところへ行く」という日本人嫌いの状態に陥る。それに対して「移民階級がいくら下層でも、移民の子だと云ふ汚辱の中にばかり、生きて行くことは忍べない。自分たちの親は遠い日本から外国に働きに来た移民でも、稼ぎ人でも、其の子の自分たちが人種的な差別と階級的な侮蔑のもとに、いぢいぢした不幸な運命を何時までも負はされて生活しなければならないものだらうか。私たちは逆に親の運命までも開いてやらなければならない義務がある」と考えるジュンは、「人間の誇りをお持ちよ。ジョージ」と反論する。

ジュンは、自分たちが受けた差別の根源を突き止めようと必死に考え始める。そうした時に出会ったキーラムというソシアリストの主張する人種、宗教、皮膚の色の差別なき運動に対する発言は、「白い人種でないという寂しさを、柔らかに、撫で消すやうにひたひたと流れてくる見えない同情が、自分の胸を温い血のやうに潤ほした」という感じをジュンに与えた。

キーラムをジュンに紹介したのは持田である。ジュンの幼い時に、ジュンの父の農家へ働きに来た、寡黙な青年である。工場では、直接会社との雇用関係ではなく、外国語に通じた狡猾な日本人監督と日本人労働者との間の勝手な契約によって、日本人労働者はその会社と日本人監督の両者から二重に搾取されるという状況になっている。持田は、その状況に対して不満を持って抗議した結果、工場から追い出され、不正入国者なので日本へ送還される災いまで招いた。移民同士の間で起こる抑圧の現象の一例である。小説では、こうした日系社会内部での差別の問題が、ジュンの眼差しを通して表現されている。持田は逃亡する前、ジュンに労働運動家、平和主義者、社会主義者についての話をする。「主義は異なっても燃える信念の前には、(伏せ字)取るに足らなかった。自由の為に戦つた革命的婦人たちの魂は、(伏せ字)を浴びても、その血潮の中から永遠の微笑と光りを人類の頭上に放ってゐる」という人権平等を唱える思想の洗礼を受けたジュンが夏休みを迎えて田舎に帰るところで、三部作の第一部は終了している。

次作、「薄光の影に寄る――小さき歩み(続)――」では、キリスト教を嫌うジュンの父親に母親が信仰を勧めて二人が喧嘩することになるという日系の宗教信仰の問題が描かれている。キリス

ト教を信仰している母親は、「下等な移民社会」で自分だけは上品に生きて来たと思う。父親も母親もジュンもその「下等」な社会に生きて来た同じ階級の人間であるという事実を母親は否定しようとする。幻覚で神を感じることによって、自分の世界だけが美しく上品だと思って来た母親の錯誤が、母親の運命を不幸で悲しいものにしているとジュンは考える。この不幸な母親は、昔の日本での生活の美しい思い出に執着し、日本に帰れば、上品な生活があると信じている。そして、教会に行く婦人たちを識った道代の「無教育だの、品が悪いのだの、労働者の子供を見下げるのは教会に行く日本人レディスよ。英語も碌に話せもしない癖にみんな偉さうな顔をしてゐるよ。美い服装をしなければ教会に行っても仲間にされないよ。同じ日本人だ癖に、自分たちだけは白人のやうな気持ちよ」という言葉から、ジュンは「差別」を生むのは経済的な問題であると同時に、日系社会内部に根付いた二世への蔑視感情だと理解する。日本人一世は自分を優秀な人種と思い込んでいるのだ。

自分たちが同じ日本人を区別することは、母親のいう上品さと同じものだとジュンは思っている。「いいから別にしておけばいい。あれは別な階級の人たちだから。人間の交わりの出来ない階級の人たちだから別にしておくんだよ」と、人を差別する母親を、ジュンは憎んでいる。そのように日系社会内部に存在する階級差別の描写は、同じく二世の加野と春子とジュンとの出会いにも見られる。苺摘み労働者（注七）としてジュンの家に来た加野は、「母親が白人の家庭に働きに行ってゐた時に」生んだ「その主人の子」といわれている混血児である。春子の方は、「母は支那人を、娘の春子は外国人を相手に淫売を行ってゐた」という噂のある娘である。「親の因果が子に報つた奴でさ。仕様のない悪いボーイでね。何所へ行つても苛められるもんだから共産党になりやあがつてね。つまらない事をしでかしちや、騒がせて歩いてゐるんでさ。本当云ふと、あんなボーイは働かせない方がいいんでさ。一所に連れて歩いてゐる娘って云ふのが、白人相手の淫売だと云ふ噂でさ。二人ながら碌なもんぢやない」という、ジュンの父親の加野と春子に対する評価は、人種差別が日系社会内部に根を張っていることをジュンに一層強く意識させる。

三部作最後の「愛は導く――小さき歩み（完）――」の冒頭では、日系社会における婦人たちの、差別による賃金低下問題や求職困難の問題等が話題に上げられる。被害者の中の一人として、ジュンは工場主に、せめて賃金局の規定する最低賃金を払うよう直訴した結果、解雇された。直訴という行動に出たため給料を支払ってもらえなかったジュンは、友達から指示された通りに、賃金局の婦人委員長に訴える。「何所へ行つても最低賃金を払わないやうな雇主は、必ず訴へて下さい。不法な雇主を訴へることはあなた方の正しい義務ですから」と、自分の行為が認められたジュンは更に自分の信念を固める。

キーラムは「外国移民に対する侮蔑を外から感じた二世は、自分の親達を侮蔑するやうになる。悲劇がここから生まれる」と言う。ジョージや自分を救ってくれるのは社会主義の主張者・キーラムだとジュンは考え、キーラムと一緒にいろいろな社会主義の

運動に参加するようになる。「一つの階級が一つの階級を支配し酷使する社会無秩序を廃して、経済的平等の上に社会を建設する新しい政治の運動」の演説をジュンも聞きに行くようになるのである。演壇のジュンは、人種の差別が自分たちを寂しくさせると語った。二世たちの暗い生活を明るい道へ導くのは社会主義社会しかないという考え方をこの時ジュンは受け入れたのである。ジュンは社会主義社会に対する美しい憧れを持って自ら兄ジョージを救う為にジョージを探す道を踏み始めると同時に、社会主義運動の道をも踏み始めることになる。

「小さき歩み」三部作は、外国で生まれ育った日系二世の若者たちが、人種差別によってもたらされた一連の階級差別や排外性の問題に関して一世の親達と認識のずれを感じているさまを描く。白人社会からの人種差別と、日系社会内部における階級差別や排外性という、二重の圧迫を受ける二世は、そのような抑圧的な生活から解放される方法を模索する。社会主義を信奉する道を踏み始める女性主人公ジュンはそうした日系二世の一人の代表者として造形されているのである。

二、人権確立の為に闘う若い娘――「カリホルニア物語」

俊子の作品の中で、女性が旧来の婦徳の束縛から離脱し、自分の思う通りの生き方を求めるさまを描いた物語は多いが、外国を舞台背景とし、日本人の血をひきながら、外国で生まれ育った女性の生き方を描く小説は少ない。そもそも、戦前の日本文学において、欧米を舞台とする森鴎外の「舞姫」、横光利一の「旅愁」（厳密には昭和二十一年まで連載）などがあるが、外国生まれの日本人を主人公とする作品は極めて少ないのではないか。そうした特異な作品の例が前述した「小さき歩み」であり、昭和十三年（一九三七）七月に「中央公論」に発表された「カリホルニア物語」である。

「カリホルニア物語」は、カリフォルニアのパサデナに生まれ育った日系二世の女性ルイとナナが、日本に生まれ育ち、旧式の封建的な教育を受けた一世である親達の生き方に同調できず、自分の本当の生き方を求める為に、それぞれの仕方で封建的な家父長制に毒されている親達と闘う姿を描いている。

ルイの父親は、日本で教育を受けた中産階級出身者で、移民地の生活はその身分に合わなかったため事業が失敗してしまい、今ではパサデナの田舎で八百屋を経営している。ルイの母親は、日本で受けた教育と知識をアメリカの文化で磨こうとするが、夫の無能力のために、自ら働かなければならない境遇に落ちている。そうした豊かとはいえない生活環境に生まれ育ったルイは、いい配偶者を貰ったらいい生活を過ごせるという母親の考え方に反発し、手に技術を持ち、職業について安定した生活を過ごすために美術学校へ入ることにしたのである。

豊かな天分を持っているルイは、自分の設計した図案が好評を得て、自分が正しい生き方を選んだということを実感している。しかし、「アメリカ人は日本人の生んだ子供が、どんなに立派な技術を有したところで其れを用ゐては呉れない。アメリカ人は自分

たちの優秀な生活の圏内へは、他の人種の優秀を持込むのが嫌ひだ」と、自分の経験から得た教訓を信じているルイの母親は、やはり自分の娘を安全な結婚生活に入らせようと考えている。その時に、ルイの父親が亡くなる。母親は、夫の遺骨をルイに持たせて、信濃の故郷へ埋葬させる為に日本へ帰らせ、同時に、ルイを結婚生活に送り込む計画を立てる。

日本に帰ってきたルイは日本の自然の風景の美しさを十分に感じる一方で、日本の習慣や礼儀や日常の生活になかなか慣れない。「日本の感情は爽やかだが明るくはなかつた。清潔ではあるが猥雑であつた」と考えるルイは、日本に自分の生活の途がないことをはっきりと意識し、一年間の日本の風景美の記憶を携えてアメリカに帰る。帰米後のルイは、いくら母親が反対しても、母親の家を離れ、自立の道に踏み出す。

ルイが自分の生き方を求める一方で、もう一人の女性ナナの人生も描写される。同じ日系二世のナナは、ルイの家よりやや裕福な環境に生まれ育った。同じ日本人一世であるナナの父親とルイの親達は経済的レベルが異なるので交際はないが、二世のナナとルイは、階級が違っても仲良しになった。ナナはルイと同じように、結婚問題で父親に苦しめられている。ナナの恋愛の相手早瀬は、経済的には無産階級に属しているが、向上心を持った優秀な青年である。階級によって人間を差別するナナの父親はその恋愛を許さない。早瀬は仕事で日本に帰ろうとするが、ナナは恋の幸福を求めて一緒に日本へ帰る決断が果たせず、結局、自分の大切な恋人を失ってしまう。ナナは、自身の意志の弱さのため、幸福の生活を求めるチャンスを喪失してしまう。ナナの父親は、事業の失敗によってナナの幸福を犠牲にし、ナナを愛してもいない安藤という金持ちの息子に嫁がせる。

その後、ナナは、「小猫のやうな柔順な動物が檻の中で威嚇されたり叩かれたりして、もっと柔順になるやうに訓練される」というような結婚生活の中で苦しく暮らしている。日本での生活で矛盾を体験し、ナナの旧式の日本的な結婚の実態に深い絶望を感じたルイは、本当の「自由の美しさ」や「自分の力で自分の生きる道」の大切さを痛感し、結婚以外に「人生を最も美しく生きる道」を発見し、自らの仕事に納得するまでは結婚をしたくないと考えている。帰米後のルイは、一流の女物専門店から注文を受けて、かつての「優しく弱弱した」「微細な美」というような画風を使わず、「大胆」で「強く」「鮮明」で「華麗」なスタイルを仕事に取り入れた結果、美術界で評判になり、さらにハリウード一流の百貨店の店を飾る大きな仕事を引き受けることになる。ルイは、実際の行動と努力によってアメリカ社会においても日本人の技術が認められうることを実証したと言える。と同時に、母親の人種差別的な考え方を乗り越えたと言える。「私たちの社会はもつと廣い。だから私たちが仕事をしさへすれば、直ぐに廣い社会へ反響して行く」という信念を持っているルイは自らの力で生きたい生き方を求める権利を獲得したのである。

ルイの生き方と対照的に、ナナは幸福を求める権利を一度喪失してしまう。ナナは妊娠した時に、結婚前の子を孕んでいると夫の母親に疑われる。後に、医者は結婚後に妊娠したものと診断す

る。ナナは基本的人権の意識の乏しい結婚生活の中で、苦しくもがいた結果、「自分の生活をクリアリイにしたい」と考えている。

小説の冒頭で、ルイは不幸なナナを慰める為にナナの嫁ぎ先を訪ね、ナナに「負けてはいけない。決して」と伝える。ルイは、ナナに会えるのはこれが最後かもしれないというおぼろげな感触を持って自分の仕事場に帰る。小説の終盤、ルイはメキシコの旅の途中、英字新聞でナナが自殺したことを知る。ナナは「自分は女のモーラルを守って死ぬ」という遺言を残したのである。

ナナは、自殺という行為を通して、自分の基本的な人権や幸福を求める権利を喪失させた封建的な家父長制的習慣や旧式な結婚制度に対する抗議を表明したのだといえよう。

一方、ルイは、人種差別を否定し、自らの力で自分の生きたい生き方を求める権利を獲得する女性として造形されている。

おわりに

俊子作品中の多くの女主人公たちは、女性の人権を認めない家父長制的社会制度下に生まれ育ち、程度の差はあれ、それぞれの立場でそのような封建的な習慣と対決しようとしている。

しかし、女性の自立した生き方の模索を描く手法は、北米の日系社会を舞台とするに至って明らかに変化している。それは一言で言えば、個人的なものから社会的なものへ、という変化である。本稿で取り上げた小説の登場人物たちにおいては、個人として個別に苦悩するというよりも、連帯し、知識（例えば社会主義の思想）を共有することによって互いに助け合い、ひいては社会改良を目指す、という姿勢が鮮明に現われている。この時期にあたかも広大なカナダの地での生活を経験した作者の関心は、女性の情念の耽美的な分析から離れ、より広い社会的な広がりを持つに至ったといえよう。

注（一）　まだ適齢期にいたっていない若い女性像の描かれ方については「田村俊子における若い女性像の変遷――本格的文壇デビュー後の作品を中心に――」（「COMPARATIO」一四号、二〇一〇年十二月）を参照されたい。

注（二）　結婚前の女性の恋愛と、結婚後の女性の生活に焦点を当てた作品群中の女性像の描かれ方については「田村俊子における女性像――恋愛と結婚に苦闘する女たち」（「近代文学論集」三七号、二〇一一年十一月）を参照されたい。

注（三）　佐藤俊子の随筆「一つの夢」（『文芸春秋』、一九三六年六月）から引用する。

注（四）　長谷川啓・黒澤亜里子作成の年譜を参照した。『田村俊子作品集』第三巻オリジン出版センター、一九八八年五月　四五五頁。

注（五）　例えば、カナダのブリティッシュ・コロンビア州の一九三五年の日系キリスト教徒の総数は六、二三七名であった。「日系合同教会史を研究した三井義は国勢調

査の数字に拠って大要次のように述べている。二系キリスト教徒の約八割強は二世であり、二世のキリスト教徒の六五％は仏教徒の親を持っていた……と。つまり、同じ世帯内に信仰を同じくしない人間が住んでいたのである」（新保満著『日本の移民――日系カナダ人に見られた排斥と適応――』評論社　昭和五十二年八月　一二六頁）。

注（六）「小さき歩み」三部作（「改造」一九三六年十月、十二月、一九三七年三月）、「カリホルニア物語」（「中央公論」一九三七年七月）。

注（七）鈴木編の『加奈太新報』によると、一九三〇年の日系農家の経営面積中四六・六％は苺栽培農地であった（新保満著『日本の移民――日系カナダ人に見られた排斥と適応――』評論社　昭和五十二年八月　八八頁）。